

埼玉親善大使レポート

留学先：中華人民共和国・北京大学 名前：三浦駿人

私は中国の北京大学に約1年間留学しておりました。まず、この度は奨学金生としてお選びくださり、多大なるご支援くださいましたこと、深く感謝申し上げます。お陰様で留学をすることが叶い、多くを学ぶことが出来ました。まず埼玉と中国の関係について述べた後、留学について総括させていただきます。

1、埼玉について

奨学生として埼玉親善大使となったことにより、現地では埼玉県を紹介したり、中国人の間での埼玉県の認識について聞いてみたりしました。そもそも中国人の間では、欧米諸国と比較すると、歴史的繋がりや地理的近接性から、日本国内の各地域に対する知識が多いといえます。加えて、近年訪日客が急増する中で、口コミも増え、「日本に旅行に行きたい」と考える中国人が増えています。従って、東京や大阪といった大都市圏は言わずと知られているほか、日本の古都である京都、一大リゾート地の北海道、くまモンで有名な熊本など、有名観光地や果物等の特産品がある地域を中心に、多くの地域が中国人の間で知られています。ただ、残念ながら埼玉県の認知度は、首都東京に隠れ、あまり高くはないというのが実情です。日本に関心が強い人を除けば、まず知りませんでした。

しかしながら、埼玉県は近年、川口市や蕨市を中心に、中国人の数が急増しています。西川口駅周辺には、日本人向けにアレンジされた「中華料理」とは異なる、まさに中国国内にあるお店をそのまま持ってきたような、中国料理店が並びます。また、一駅隣の蕨駅に近い芝園団地は、5000人余りの人口の半数以上が中国人であるといえます。期せずして埼玉県は日本人と中国人の「日常」が目に見える形で出会う、日本の中での最前線となっているのです。埼玉県に集まる理由は、都心に近いながら比較的家賃が安いこと、既に中国人コミュニティがあるため初めて来日した中国人も安心して暮らせること等が考えられています。

私は、中国人の友人に対して、自分の出身は「埼玉県」であると伝え、どのような地域であるか紹介するよう常に心がけていました。小江戸川越、盆栽村を始めとした、観光客が好む、伝統的な文化を味わえる場所や、秩父・長瀬のような豊かな自然もあります。これらは、それ自体として魅力的であり、間違いなく訪れる価値のある場所です。しかし、まだ日本を訪れたことのない中国人から見て、京都や北海道などを差し置いて、ぜひともまず行ってみたい、と思わせる地域とはなりづらいことをやはり痛感しました。一方、このような状況に対して、「埼玉は中国人が多く居住し、多文化共生の先進地となりつつある」、ということは、多くの中国人の関心を引くことであります。

埼玉県と中国の関係において、観光・食品・産業分野で今後も引き続き関係性が深まることは間違いありません。ただやはり、以上のことを踏まえたとき、友好交流の中心となるべき、日本全国の中でも特徴あることは、埼玉県の中で、種々の軋轢や問題を生みつつ

も、多くの中国人が日本社会で暮らしている、という「日常」それ自体のような気がしません。

生活習慣、食文化、言語、人間関係の在り方等々、日本人と中国人の間の、日々の暮らしの中にある差異は、決して小さくなく、現状見逃しがたい課題があることは事実です。急激な人口流入の中で、県や市は地域の大きなデザインをまだ描き切れてはいないと言わざるを得ません。ただその中においても、芝園団地かけはしプロジェクトや西川口の清掃運動などの草の根の取り組みが、ともすれば分断や対立しかねない日中のコミュニティーを繋いでいます。もちろん行政や団地管理者も多文化共生へ向けた取り組みを拡大させています。

埼玉県、埼玉県民としては、今後このような等身大の日本人と中国人が日常を交錯させ、共生しようとしている社会を、差別や先鋭化した対立へと至らないよう議論しながら築き、そのことをもってして中国人に「埼玉県」をアピールしていくことが良いのかもしれませんが。そこから関心を持ってもらうことで、観光・食品・産業といった分野の交流もより一層活性化されていくでしょう。

2、留学生活について

中国への留学を志したのは、端的に言えば、「よくわからないが重要なものをきちんと知りたい」というような漠然とした想いからでした。中国は改革開放以降急速な経済成長を遂げ、国際政治の舞台でも地位を高めています。何より日本への影響力は非常に大きく、それは日々増えています。一方、政治体制の違いや安全保障上の対立を筆頭に、中国に対して理解しがたい点、納得しがたい点が多々ありました。この狭間の中で、体系的に中国や日中関係について学びつつ、実際に現地で暮らし、その社会を内側から体験して、中国に対する理解を深めたい。延いては、日本の大学では政治学を専攻する身として、日中関係や世界情勢の今後を考えて行きたい、と考えました。そして大学の制度を通じ、北京大学に留学することとなりました。

現地ではまずやはり、語学に苦しみました。日本と同様に英語が必ずしも通じるわけではない中で、日常生活において中国語を運用することが求められます。日本で少しだけ勉強しただけの私は、始終困難に向き合っていました。ただ現地で実際に使うことや中国人の友人に助けられることを通じ徐々に使えるようになり、HSK6級で高得点を取得することも叶いました。むろん未だ甚だ不十分なレベルであり、今後も継続して学んでいきます。

とはいえ新しい言語を学ぶとは新しい世界を知ることと言われるように、日本語と同じ漢字を使いつつも体系が大きく異なる中国語の表現に引き込まれ、中国語で直接中国で出版された書籍やメディアを読んでいると、日本にまでは伝わってこない中国人の当たり前の日常や議論が分かってきました。「中国人はうるさい」という諺りを日本では受けがちですが、中国人との中国語での直接の遣り取りの積み重ねは、言語の遣り取りにある機微や息遣いへの理解へと繋がりました。

中国は非常に広大な国土を持ち、多様な文化を保持しています。寝台列車で40時間揺られたりヒッチハイクしたりしながら、全国各地を回り、それを肌で実感しました。何千

年も歴史を積み重ねてきた土地に、約 14 億人分の暮らし、人生があります。また改革開放以降の 40 年を経て、生活状況の改善を伴う都市化が進み、全国に張り巡らされた交通網が成長する経済を支えています。AI などの複数の先端科学技術分野では世界トップレベルに達し、IT 企業を中心に革新的なサービスや製品が生み出され、社会は急速に変化しています。日本全体として、負の側面ばかりが強調され、中国のイメージがどこか「遅れた国」として固定化するきらいがある中で、日中関係や世界情勢に対する見方を決定的に誤らないようにする努力が必要であるように思いました。この視点において、領土問題や歴史問題が、習近平を中心とする共産党・政府に「核心的利益」と設定され、日本も国内世論と兼ね合いからも譲歩や交渉の余地が非常に小さくなっている中で、議論を不必要に先鋭化させたり、相手を無碍に批判したりすることなく、冷静に状況を分析して、問題の対処にあたらなければなりません。

とはいえ、中国の「負の側面」には見逃せない懸念点があることは間違いありません。中国は共産党による事実上の一党独裁に基づく権威主義体制ですが、これは日本や西欧・米国等が標榜する自由民主主義体制とは大きく異なります。さらに、中国においては、表現・報道の自由は事実上存在せず、それに対する締め付けは習近平体制移行に一段と強まっています。ファイアウォールにより海外からの情報を遮断し、五毛党がネットの情報統制を行うことに加え、信用スコアや AI の高度な活用が、新たな監視社会の形を生み出しつつあります。これに留まらず、都市と農村の戸籍の違い、司法の透明性の低さ、民間企業の活動に対する政府の介入、民族問題など、重大な問題が横たわっています。もちろん先入観に基づく頭ごなしの非難は避けるべきで、中国は西洋とは異なる独自の価値観の下に、その差異を正当化します。どの国にも社会課題はあり、中国特有のものとして突き放し、自らの社会やその制度の現状を顧みず他人事とすることは、適切な態度だと思いません。ただ、一帯一路や人類運命共同体といった理念を中国が打ち出して、世界のルールメイキングにも多大な影響力を及ぼしてきている今日、かような性格をもつ中国が、日本社会、世界にどのような変容を迫っているのか正確に見極め、必ずしも反対・阻止一辺倒ではありませんが、議論していく必要があることも実感しました。

今回の留学において、大学で法律、政治学やメディア論の講義を複数受講し、かつ数多くの現地の方と様々な形で交流したことは、大変貴重な経験となりました。今後は、日本の大学において中国・東アジアに関することを中心に学びつつ、国際的な問題に少しでも貢献できるよう励んでまいります。埼玉県の国際化に関しても積極的に携わることが出来ればと考えている次第です。改めてこの度は、奨学生として多大なるご支援賜りましたこと、深く感謝申し上げます。



左から：新疆の『社会主義核心的価値観』を宣伝するポスターは漢語とウイグル語併記、今後この地域はどうか/北京大学キャンパス内の湖、極寒の冬は凍りスケートが出来る/寝台列車の中、このような列車に乗り各地へと旅をした